●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 8

8th Letter

西行法師の二十五丁橋伝説

伝説そぞろ歩き

行き交いて
あまたの問答
重ねつつ
人生永遠に
手習いと知る

熱田の杜で粋な問答
二十五丁橋の伝承話

今回は熱田神宮の二十五丁橋に伝わる伝説について。二十五丁橋は、「熱田社参詣曼荼羅図」などにも記されていて、戦前までは神楽殿の南にありましたが、昭和30年に現在地（西門から入った南側の南神池の東）に移築・復元されました。二十五枚の石を並べたことからそう呼ばれています。

西行法師は、鳥羽上皇の北面の武士で佐藤義清と言いましたが、23歳で出家。諸国を行脚しながら多くの歌を詠み、歌集に「山家集」があります。彼の歌は「新古今和歌集」にも94首入っているほどで、歌人としても広く知られています。

時は鎌倉時代、今から800 年くらい前のこと、その西行法師が東国への旅を思い立ち、杖を頼りに都を出ます。鎌倉街道を萱津から古渡、そして尾頭を経て、熱田に到着。真夏のカンカン照りの街道を歩き続けたので、衣もほこりまみれで、汗でぐっしょり濡れてしまいました。

熱田神宮にお参りしようと、参道を進むと、大木の生い茂った森の中はひんやりして、今までの暑さが嘘のよう。神前にお参りした後、西行法師は二十五丁橋の石に腰を降ろして一休み。森の涼しさでみるみるうちに汗がひき、そこで、西行法師は思わず一句口ずさみます。「かくばかり木陰涼しき宮立をたれか熱田と名付けそめけん」

すると、そこへ白絹の衣をまとった人が近づいてきて「ご坊はどなたですか。これからどこへ参られるのですか」と西行法師に問いかけました。

「拙僧は西行と申しまする。これより東へ参ろうと存じまする」と西行法師が答えると、その白衣の人はニコニコ笑って「西行は西へ行くと書くのに、なぜ東の方へ赴く」と歌を口ずさみました。

西行法師はびっくりして頭を上げて白衣の人を見ましたが、そこにはもう誰の姿もありません。これは「こんなに涼しいのになぜ熱田と名付けたのか」と詠んだのを熱田の神さまがたしなめられたに違いないと思い、後ろも振り向かずにあわてて逃げ出したという話です。このエピソードがその後、長く伝えられ、名古屋甚句にも謡われています。

人生を教えてくれる
スピンクスの謎かけ

ギリシャ神話にもウィットに富んだ問答があります。「スピンクスの謎かけ」がそれ。テバイの王・ライオスは「自分の息子に殺される」という神託を受け、生まれたばかりの息子・オイディプスを王妃・イオカステから奪い、コリントスとの国境近くの山中に捨てさせました。

オイディプスはコリントス王・ポリュボスの元で育てられ成長します。しかしある日、「自分が父親を殺し母親と結婚する」という神託を受けます。ショックを受けたオイディプスは、父母から離れようとコリントスを出てテバイに向かうことにしました。この途中、狭い山道で老人に出会い、どちらが道を譲るかの言い争いの果てに、オイディプスはその老人を殺してしまいます。実は、その老人こそが父親のライオスでした。

テバイに向かっていたオイディプスは、その直前でスピンクスという怪物に出会います。顔は人間の女性で、胴体はライオン、鳥の翼を持っている恐ろしい怪物で、エジプトでいうスフィンクスのことですが、形態は少し異なっています。そのスピンクスは人々に難問を出して、答えられないと食べ殺してしまうことで、恐れられていました。

スピンクスはオイディプスに「朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足。それは何か」と問いかけました。オイディプスは「それは人間。生まれてすぐは四本足で這い、やがて二本足で歩き、老いると杖をつく」とあっさり答えました。スピンクスは正解を答えられ退散してしまいました。

人々を悩ましていた怪物を退治したオイディプスは、その栄誉によりテバイの王として迎えられ、王妃・イオカステ、つまり実母と結婚することになり、結局「父親を殺し母親と結婚する」という神託通りになったのです。やがてオイディプス自身がそのことを知り、自分の罪に驚いて自分の両眼をつぶして、盲人となって放浪の旅に出ることになります。エディプスコンプレックスは、父を憎み母に愛情を覚える心理傾向のことですが、オイディプスのエピソードが元になっています。

思うに、人生は一日一日が修行。這い這いで始まり、やがて一人立ちし、さまざまな人と出会います。そして問答を繰り返しながら自分を高めていき、杖を携え熟成へと向かう、生涯手習いの場なのかもしれません。二十五丁橋を眺めながら、人生について考えてみるのも感慨深いものです。

▼ 二十五丁橋は、昭和30年に現在地に移築・復元されたもの。

次回は、伝馬町に伝わる「ほうろく地蔵の伝説」をお送りします。お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K　■ イラスト／Rei　■ 取材・文／Icarus